

カメラ

松元千春

目次

9	8	7	6	5	4	3	2	1
終焉	修復	決別	激写	愛憎	崩壞	恐怖	発見	盛夏
337	308	262	167	117	76	51	23	6

カメラ

1 盛夏

ファイトーッファイトーッ!!

体育館の中に、女の子達の大きなかけ声が響く。

窓の外には真つ青な空が広がり、入道雲が街を飲み込もうとするようにもくもくと立っている。夏の象徴ともいえるそれは、蟬の鳴き声によく似合う。今年の夏は、例年に勝る猛暑で、平均気温三十七度をすでに一週間はキープしている。そんな状況にもかかわらず、ここ県立高風中央高校の体育館は、窓を閉め切り、暗幕で光を遮断していた。内部は目の前が歪んでしまうほど蒸し暑い。

現在この体育館では、ハーフコートに分かれ、半分は男女混合のバスケット部、もう半分は女子バレー部が使っていた。カーテンを引いているのは、それを怠ると逆光に遮られ、ここぞという瞬間にボールを見失うからだ。さらに、風が入るとカーテンが揺らいでしまうため窓も閉じられ、密閉空間となっている。サウナよりも過酷な環境に当然気分を悪くする生徒は後を絶たない。バレー部の遠藤由紀もその一人だった。

体力には無駄に自信のある彼女だが、コートの両サイドに分かれてサーブの練習をしていると急

に目の前がチカチカしてきた。行き交う数多くのボールが何重にもぶれて見える。足に力が入らず、膝ががくがくする。何かに掴まろうと宙へ突き出した手も、次の瞬間にはまるでテレビの砂嵐のような目の前の映像により、虚しくさまよう。座らなくては！と思った瞬間、猛烈な吐き気と目眩が襲ってきた。由紀は、ボールを片手で抱えたまま、崩れるように床に倒れた。薄れゆく意識の中、マネージャーと顧問が驚いた表情で駆け寄ってくるのが視界の隅に入った。

意識が回復した時、由紀の手の中のもののはボールから袋に入った大量の水に変えられ、コンクリートの上に寝かされていた。重い頭を少しだけ持ち上げると、真つ赤な部活用ジャージが上半身にかけてある。名前を確認すると親友の陽子のものだった。このジャージは、ただでさえ真つ赤な色のせいで恥ずかしいのに、背中には白い糸で大きく学校名まで刺繍されており、遠くからでも目立ってしまう。部内に批判は多いが、伝統物ゆえ変えることができないらしい。練習試合に行く際には、このジャージで電車にも乗るのだから、重要な問題だ。毎年決まって新入生に嫌がられる。二年生の由紀でさえ、学校の外では常に着ていて恥ずかしさを感じる。だが、今だけはこのジャージに感謝した。おそらく汗で冷えたのだ、心なしか寒気がする。ジャージをかけ直しながら額に手をやると、冷却シートが貼ってある。さらには、いくつもの保冷剤をタオルで巻き、枕として敷いていたようだ。

「気がついた？」

頭上からの声に、背中で壁を擦るようにならずに上半身を起こすと、マネージャーの小宮山明子（通称 あっこ）が麦茶を飲みながら、うちわで扇いでくれていた。その風で由紀の肩に届くくらいのうす茶色の髪が、静かに舞う。顔にかかった髪をよけて整えながら、由紀は言った。

「あたし……倒れた？」

「倒れた」

あっこは即答すると、自分が飲んでいた麦茶のカップをそのまま由紀に渡した。由紀はそれを受け取ると、代わりに持っていた氷を手渡した。

「うっわあ！ 最悪……。ごめんねー、迷惑かけて」

由紀は頭の下に敷いていた保冷剤の束を、タオルをはずして今度はつむじに置き換えた。水滴が、髪から頬へと伝ってくる。何分経ったのか定かではないが、すでにそれは使い物にならないほどぬるくなっている。体育館の中から聞こえる練習メニューの順番を考えて、どうやら三十分近くは寝ていたようだ。

「いいのいいの。私だって、あんな地獄の暑さから抜け出せてちよつとラッキーだし。ポリオも、由紀は治ったら帰っていいって言っていたよ」

あっこは、うちわで由紀を扇ぎ続けながら、ウイנקをして言った。降り注ぐ太陽の熱は、いくら日陰だといっても容赦がない。その小さな風は、吸い込まれそうなほどの心地よさを届けてくれる。

「ポリオが？」

ポリオは国語教師であり、由紀の所属する女子バレーボール部の顧問だ。中堀和夫という名前からとって、ポリオと陰で呼ばれている。あの蒸し風呂の体育館でも、生徒を気遣う優しさなく、百キロを超える巨体を意外にも自在に動かし猛烈なサーブを打ってくるので、女子バレー部員に相当嫌われている存在だ。

「私、送ってくからさ」

あっこの顔にはにやにやと笑みが浮かんでいた。

「だから、帰りに交差点のぶるでかき氷、食べていかないっ？」

あっこはいつもこの調子である。入部当初、あっこも由紀と同様にプレーヤーだった。しかし思いの外練習は厳しく、平日の朝夕の練習はともかく、土日祝日の全てに休みがないことがすぐに判明した。おそらく年間で数えても、お盆の三日とお正月の三が日しか休みがない。

あっこは、それがわかるとすぐにマネージャーに乗り換えた、いわゆる世渡り上手なのだ。

だが、マネージャーになってからの努力は周知の事実で、テーピングや試合の記録簿管理、部員の世話については全員が感謝していた。時々こういう不真面目さが顔を出し、喧嘩の原因を作り出す素さなければ、尚更評価は上がること間違いなしだ。

「あっこ……。あたし一人で帰れるよ。陽子達はまだやっているのに悪いし。でも、色々ありがとう」

「なあーんだっ。つまんなあい！ まあいいや、わかった。立てる？」

あっこは、一度不服そうに頬を膨らませたが、由紀が立ち上がろうとすると、すぐに手を貸した。

さらに由紀の手からカップを受け取るだけでなく、自分のタオルで、由紀の濡れた額までも拭いてくれた。さすがである。由紀は立つと同時に軽い目眩^{めまい}を覚えてよろけたが、いつまでも寝ているわけにいかないと自分に言い聞かせ思いきって力を振り絞る。歩きながら振り返ると、体育館前のコンクリートの地面には、由紀が寝そべっていたところに汗の跡がくつきりと人型で残っていた。

二人が重い体育館の鉄扉^{てつひ}を開けると、もわつとした空気が外へ溢^{あふ}れた。ドアの隙間^{すきま}からの光で数人が振り返った。相変わらず中はほぼ真つ暗で、部員達は手押し車をしながらハーフコート往復している。手押し車とは二人で組になり、一人が両手を床につき、もう一人が手についている人の両足を持ち上げ、そのまま前進する一種の筋力トレーニングだ。コートを何度も往復するのだが、その回数はボリオの機嫌ひとつで左右されるため、先が読めない恐怖ともいえる苦痛を強いられるのだ。そこで足を持つ側は、“早く進め”とばかりにどんどん押しながら歩くことで、多少の優越感を得てストレス発散をして楽しんでいる。しかし、往復する毎に役割が入れ替わるため、その後の仕返しは想像に難^{かた}くない。それでも、一瞬の楽しさを見つけることで、部員達は必死にこの地獄を毎日乗り越えているのだ。特に、夏休みに入ってから、練習時間が普段より多くとれるので、この手押し車を含むメニューは筋肉強化月間と称して毎日行われている。おかげで二の腕の太さを気にする輩^{やから}が増えたが、試合に出なければ我慢する他ない。

由紀は、その手押し車をする部員達を横目に、一番隅にいるボリオの元に駆け足で行き、倒れた

謝罪と早退のお礼を簡単に述べた。できるだけ、いつも感じている不快感を顔に出さないように努力しながら……

「おお。遠藤、水分はちゃんと取っていたのか？ それくらい、自分で管理してくれなきゃ困るだろう。それにまだ顔色悪いぞ。帰って寝ろ。……それと、お前、見かけどおり体重少ないな。もつと肉を食え。だから倒れるんだ。太れ。もつと太れ」

パイプ椅子にどっかりと座り、由紀の方を一度も見ることなく、ボリオは冷たく言った。

全体重をかけられて、椅子は抗議するようにキイキイと軋^{きし}んだ音をたてている。椅子からはみ出しているお尻の肉の量に目を奪われていた由紀は、一瞬戸惑^{とまど}った。

「え？」

何を言われたのか理解できず、ボリオの顔へ視線を移す。

「そのわりに、胸は結構あるんだな」

しかし、ボリオはそれに答えることなく続けざまに言うと、面食^{めんじき}らった顔の由紀にやつと視線を合わせ、にやりと笑って視線を胸へと下げた。

……こいつ。

由紀は軽く会釈^{えしやく}だけ残し、陽子のジャージを片手に一目散にその場を後にした。振り返ることもできず、その必要もない。ボリオの視線が、今も舐^なめるように由紀の身体のラインを追いかけているのを背中に感じたのだ。コート脇に置かれた給水ポットの前で、麦茶をがぶ飲みしている陽

子へ駆け寄る。

「お!! 由紀。大丈夫? びっくりしたよ、いきなり倒れるから。人ってあんな風に倒れるんだって、初めてしっかり見た気がするよ」

陽子は、自宅から持参しているビールジョッキで、麦茶をグビグビと飲んでいる。冗談半分のその言葉にも、最大限の気遣いと心配が含まれていることに由紀は気づいたが、今は背中に刺さる視線がたまらなく気持ち悪い。

「陽子! ごめんね! 今日はまだ帰る……ジャージありがとう!」

一瞬でも早く体育館を立ち去りたい由紀は、少しでもその思いが伝わるようにと願いを込めて陽子を見た。シャワーで全ての汚れを洗い流したい。それしか頭になかった。

「うん。それがいいって。きつと疲れも溜まっていたんだよ。ごめんね、私も一緒に帰ってあげられなくて。あいつがうるさいだろうからさ。夜メールするよ」

どうやら伝わったらしい。由紀は、その声を曖昧に耳に残しながら適当な返事をして頷くと、倒れたことも嘘のような速さで体育館を後にした。陽子には、夜のメールで謝ればいい。いちいち小さいことに文句を言わないのは、長い付き合いで承知している。由紀は、部室に入ると急いで制服に着替え、校門まで走った。汗臭さや乱れた髪など気にならないほど、とにかく体育館から逃げ出したかった。今すぐに着ている制服を脱いで、大声で叫びたい感情にかられる。お昼時ということもあり、暑さは一日のピークを迎えていた。それなのに、なぜか由紀の全身は冷え切っていた。

……そのわりに、胸は結構あるんだな。

ボリオの言葉が頭に蘇り、背筋が凍る。ブルつと身体を震わすと、背後から聞き慣れた声が追いかけてきた。

「おーい!! 由紀い!」

校庭の方角に目をやると、網に入ったサッカーボールを手からぶら下げた男子が、それを蹴りながら校門へ向かってゆつくりと歩いてきていた。

「裕太!」

由紀の幼なじみ、溝端裕太だ。裕太はサッカー部所属で、由紀と同様に毎日練習に明け暮れている。違う点と言えば、炎天下で練習をしているために焼けた、浅黒い肌くらいだろう。若干由紀より高めの身長で、男子の中では平均よりも低かったが、本人に気にする様子はない。サッカーに身長は必要ない、足と技で勝負する。それが裕太なりの主張だった。

「どうしたんだよ。バレー部は、まだ終わっていない時間だろう?」

裕太は、由紀に追いつくと、校門脇に停めてある自転車まえかこの前籠に、蹴っていたサッカーボールを投げ入れた。バウンドしそうな上から押さえ、ポケットの中を探って鍵を取り出す。慣れた手つきで自転車まえかこを操作する裕太を眺めながら、由紀は言った。

「倒れた。暑くて」

裕太には可愛く答える必要もない。一番素すを出せるのだ。疲れたときに疲れたとはつきり言え

る。しかし、休むために肩をかしてほしいとは言えない、そんな関係。無駄な言葉はいらない。彼は、きちんと意味を汲み取ってくれるのだ。ただ、もう少しだけ女の子扱いをしてほしいと思うのは我が儘か。

「倒れた!? ……体育館の部活は、ある意味で外よりきついからな。大丈夫か？」

「もう治った……」

「本当かよ。そのわりには顔色悪いぞ？ 頭でも打ったか？」

心配してくれているようで、裕太は母親がやるように由紀の額に手を当てた。

「ん……、これは違うから」

まさか、顧問にセクハラを受けたとは、いくら幼なじみでも言えない。

「そっか。じゃあ、後ろに乗ってけよ。ちよつとは楽だぞ」

そう言うのとサドルに跨り、後輪の上に位置する座席を軽くはたいている。

「当たり前」

由紀は、後部座席に座ると、すぐに自分の薄っぺらい鞆を裕太との間に挟んだ。

朝も夕方も時間が合えばしよつちゅうこうして登下校する二人だが、由紀は、裕太の背中にくつつくことも腰に腕を回すこともない。この鞆も、わざと距離を置いたための理由づけだった。

「ちゃんと掴まれよ」

裕太も鞆について触れることはなく、その言葉を言い終えるより早く自転車急発進させた。二

人の高校、県立高風中央高校は関東地方のとある田舎にある。行こうと思えば、都会の高校へも電車通える範囲だ。しかし、二人は地元で簡単に通うことができ、かつ偏差値そこそここのことを選んだ。高校受験をするときに、お互いに相談することはなかったが、暗黙の了解、昔からの約束、当たり前のごとく同じ進路を選んだ。家族もそんな二人に異を唱えることはない。自他ともに認める双子の兄妹のように育ったのだ。

校門を出てから両脇に広がる田圃の一本道を快走し大通りまで出ると、自転車はいきなり左方向へと向きを変えて停車した。急ブレーキというほどではないが、それでも由紀は、バランスを崩して転げ落ちそうになった。

「ちよつと！ 裕太何やってるの！ びっくりするじゃない！」

まだ気だるい身体と裕太の運転への信頼感もあり、ずっと目を瞑っていた由紀は、パッと目を開けて言った。ついでに、彼の背中も叩いておく。

「いや、由紀は暑くて倒れたんだろう？ だから、なるべく冷たい物食べた方がいいよ」

そう言っ、裕太は鍵が入っていたのと同じポケットからお財布を取り出した。

「ちよつと！ あたし早退したんだから、見つかったらやばいよ」

由紀は慌てて、通ってきた一本道を振り返った。しかし、裕太はそんなことお構いなしだ。お財布の中を確認するように覗くと、そのまま店の自動ドアから入っただけでしまっ。

「大丈夫だよ。みんなまだ練習しているんだろう？ お金がないなら奢ってやるから」

裕太はそう言うのと、由紀に向かって財布を振ってみせる。由紀は、「奢ってやる」という甘い言葉に負けて座席から飛び降りると、自動ドアが閉まる寸前に店の中に飛び込んだ。外とは正反對に、中はクーラーで快適だ。学校からの一本道と大通りとの交差点に位置するこの店は、「ぶるる」という名前で高風中央高校はもとより、近くの中学校の生徒にも愛される地元で人気のパン屋だ。

夏の間だけかき氷を販売しているのだが、その種類の豊富さとシロップの多さは天下一品である。夏はパンよりも氷の方が売れ行きがいい、と店長が嘆いているのを、二人は毎年目に見ている。そんな二人は、幼い頃からこの常連だ。夏にはいつも二人で氷を食べに来ている。中学時代に一度、体育祭で保護者が開いている出店の氷には満足できず、買いに来たこともあった。放課後、裕太は武勇伝としてそのことをクラスで披露した。話を聞きつけた担任が、二人をみっちり叱りつけたが、^{ぶるる}の店長はその夏中、かき氷を無料で食べさせてくれたのだった。

「おじさん！ レモンふたつ！」

店に入るなり、裕太はレジの女性ではなく調理場へと叫んだ。

「おー！ 裕じゃないか。久しぶりに二人お揃いだね！」

調理場から出てきた店長は、頭にかぶっていた真っ白の帽子を取りながら言った。帽子を取っても髪の毛は全て真っ白なのが、由紀のちよっぴりお気に入りだ。店長の歳を聞いたことはないが、見た目は五十前後といったところか。それでも由紀が覚えている限り、店長は昔からの真っ白な髪だった。

「ちよっと待っている。今日は、特製かき氷をやろう。今度の夏祭りで出そうと思っただけだよ」

「ラッキー!!」

二人は喜び叫んでハイタッチをかわすと、入口の自動ドア脇に置いてある木彫りの長椅子に並んで腰かけた。この時間、すでにパンはほとんど売れてしまっていて、あんパンや食パンなどのシンブルなものが、いくつかトレイの上に残っているだけだ。

「パンがないのに、いい匂いがあるね！」

かき氷を製作中の店長に由紀が言うと、彼は豪快に笑った。

「口が上手くなったな、由紀ちゃん。嬉しいことを言ってくれ。裕、ボヤボヤしていると由紀ちゃんが誰かにとられちゃうぞ」

冗談を言いながら、二人の前にふたつのかき氷を置いた。が、裕太が手前のを取ろうとすると、店長は無言で奥のものを裕太に押しつけた。「手前の方がシロップたっぷりだから、可愛い由紀ちゃんにな！」と笑いながら。裕太は、不満そうに首を傾げたが、大人しくカップの中にストローを突き刺した。

「おいしい！ なぁに？ これ」

一口食べ、初めての味に出会った由紀が満面の笑みで聞くと、パイナップルサイダーだと言う。店長は、いかにこの味を引き出したか身振り手振りを加えて説明してくれた。どう考えても、ただパイナップルジュースとサイダーを混ぜただけのようだが、二人も主人も満足だった。十五分ほど

で店を出ると、裕太は今度こそ寄り道することなく自宅へと自転車を走らせた。自宅前に到着すると、由紀は鞆の中にあつた袋詰めのココロレートをひとつ取り出して裕太の手に無言で滑りこませ、隣の自分の家へと入っていった。裕太が、由紀の背中を目で追いかけるながら手を開くと、そこにはすでに暑さで溶けて食べられなくなったココロレートがあつた。両脇をねじって包まれた小さなそれは、脇からドロつと溢れ、手が汚れてしまっている。

「嫌がらせか……？」

裕太は、手の平についたココロを舌で舐め取り自転車を片づけると、玄関のドアを開けた。靴を脱ぎ、階段を上がつて二階の自室へ入るまでに二分弱くらいだろう。しかし、裕太が部屋のドアを開けると、すでにそこには由紀がいた。当たり前のように、部屋用のジャージで床に寝転がり、裕太の漫画を読んでいる。すでに冷房がつけられているところは、呆れるよりも感心してしまう。だが裕太にとつても、昔から同じことが何百回と繰り返されているので、さして違和感があるわけではないのだ。ひとつ文句をつけるとすれば、溶けたココロレートのたくさん入った大きな袋を、床に置いておくくらいだろう。

「お前さ、ジャージ以外の服ないの？」

チョコにさえ文句を言わなかった裕太は、さすがにげんなりした様子で言う、部屋専用にあるサッカーボールを人差し指でクルクルと回し始めた。

由紀と裕太の家は隣同士である。そして、全くの偶然だが部屋同士も向かい合っているのだ。そ

のため、ほとんど毎日由紀が窓を乗り越えてくる。それは小さい頃から、風邪を引いたときも試験前も変わることがなかった。

「ないもん。……うそ。あるけど、ここに来るのにわざわざ面倒くさいよ。それより、今日こまで来るのに玄関から十五秒だよ。すごいでしょ」

それだけ言うと、夕飯の時間まで会話をろくにすることなく、それぞれに漫画を読んで過ごした。自分の部屋で読めばいいのだが、その考えは二人にはあり得なかった。由紀も当然のように裕太の部屋に通つたし、裕太がそれを拒むこともなかった。時間になると、由紀はいそいそと自分の部屋に帰っていく。随分前に、由紀の母親が夕飯に下りてこない彼女を心配して部屋に上がつてくると、そこに由紀の姿がないことがあつた。窓越しに裕太の部屋にいるのが見つかつてしまい、その日はこつびどく叱られたのだ。窓を乗り越えるなど危ない、という建前で叱られたが、結局は夕飯の時間までダラダラと漫画ばかり読んでいるのが気に入らないらしい。母親は、裕太の前だからこそ、その本音を言えなかったのだと由紀はわかっている。実際、裕太が漫画ばかり読んでいるのは事実なのだから。裕太が由紀を誘っていると勘違いしたのか、母親は夕飯の時間になると部屋に上がってくるようになった。それに嫌気がさして、由紀は早めに切り上げるようになったのだ。一階へ下りると、さも部屋で勉強をしていたという素振りを見せるのも忘れない。肩を叩いたり、首を回したり。それだけで、どうやら母親は満足するようだったから簡単だ。もし、裕太の部屋にいるのがまた見つかったら……その時はその時だ。

そして今日も、裕太の部屋から戻り夕ご飯を食べ終わると、由紀は一度も見ていなかった携帯を広げた。一件の着信履歴が残っている。

「忘れていた！ 陽子！」

メールを送ってくれるものとはかり思っていたが、親友は電話をかけてきてくれたのだ。

慌ててかけ直すと数回の呼び出し音のあと、元気な声が耳に届く。その大きな声に圧倒され、通話音量を急いで下げる始末だ。

「もしもし？ 由紀!? どう！ 調子？ だいぶ良くなった？」

唐突に聞かれ、*ぶるる*に立ち寄ったことを除いて、偶々会った裕太に連れて帰ってもらったことを話すと、陽子は安心したような声を漏らした。

「そっか！ よかったよかった。心配していたけど、彼氏と一緒になら安心だったや。部活はどう？ 明日来れそう？」

周囲の人間が、こうして裕太との関係をからかうことに由紀はすでに慣れていて、否定をする気にもならない。いつ頃からであろうか。自分と裕太の関係は幼なじみでしかない、それに不満を抱き始めた頃から否定しなくなったことを、由紀自身気づいてはいなかった。

「もう平気。夕飯も食べたし、明日はちゃんと行くつもり。でも今日ね……」

由紀は、今日起こったボリオの一連の出来事を全て隠さずに話した。陽子が麦茶をがぶ飲みしている間に、由紀がどれほど嫌な目に遭ったのかということを……。すると、意外な言葉が彼女の口

から返ってきたのだ。

「本当？ 最悪だね！ でも倒れた時さ、あいつが由紀のこと抱きかかえて運んだんだよ。もうね、お姫様だっこ。誰も手出しできなくて。由紀は、本気で死にそうな顔していたし……。ごめんね、止めればよかったのかもね」

「ううん……。あたしが倒れたこと自体が落ち度だし」

「でも、あいつ色んな子から恨まれているよ。知らなかった？ 由紀はまだいい方かもしれない。

A組の佐伯さんなんて、普通に胸を触られたって噂だよ？」

常日頃飛び交う周りの噂なんて信じられないと思う由紀だったが、ボリオに対しての噂は信じることでできた。根拠も何もないのだが。

「きもちわるい……。あたし何かされたかな……。？ 胸触られたかもしれない！」

「大丈夫だよ。だから、あつこがずっと付いていたんだって」

「え？ そうだったんだ。あの子何も言わなかったから……。陽子も気を付けてね？」

「私？ 大丈夫だよ。無駄に毎日スパイク打ってないって。一瞬でも触られたら、殴り倒してやるんだから！」

電話口から陽子の興奮した声と共に、シュツシュツと腕を振る音も聞こえてくる。

部内で一番の期待の星、レフトのエースアタッカーとして活躍している陽子なら、本当にぶん殴りそうだ。由紀は声を上げて笑った。心を塞いでいた重い気持ちも少しだけとれた気がした。その

あとも、二人は練習の厳しさや休みのなさ、様々な人間関係の問題を含む部活の不満を一通り話すと、翌日の練習に備えて一時間後にやっと息抜きの電話に終止符を打った。

2 発見

雨が一滴も降ることなく、しばらく猛暑が続いたある日のことだった。お盆休みの数日はあつという間に過ぎ、夏休みは一気に終盤へと向かい始めていた。由紀達は、まだ高校二年生だったので受験勉強をすることもなく部活ばかりの日々だったが、却^{かえ}ってそれが宿題を手間取らせる原因となっていた。その日も午前中からの怒濤^{どとう}の練習を終えた由紀と陽子は、帰宅途中に「ぶるる」でかき氷を食べることにした。

「今日もポリオ機嫌悪かったね」

由紀は、一度裕太と食べてから嵌^{はま}ってしまったパイナップルサイダー味のかき氷を、ストローで口に運びながら陽子に話しかけた。反対に、陽子はかき氷のシロップが大好きなので、氷を食べることなく全てシロップに溶かそうとただ待っていた。たまに手で温めたり、息を吹きかけたりと待ち遠しそうに眺めながら答えた。

「やばかったよね。手押し車だけで五十往復させられるなんて、最後は本気で吐きそうになっちゃったよ、私。あの暑さ、どうにもならないのかな。それに、ポリオの巨体が視界に入るだけで失神^{しん}しそうだよ」

「あたしだって手が棒になっちゃった。足は棒になるって言うけど、まさか手で歩くことになるなんて思わなかったよ。動物だって四足使っているんだよ。もう違う生命体にもなった気分……」

ストローを口にくわえたまま、両手をテーブルの上にだらんと解放するように伸ばし、由紀は納得がいけないとばかりにしかめつ面をしてみせた。陽子は、まだ氷に手をつけることもなく、由紀の顔を見て笑っている。

「確かに！ あんな風に歩くことは一生ないよね。体育祭の種目に加えてくれたら、バレー部が一位を総なめだってえ。でもさ、なんでボリオが、あんなに手押し車に執着しゅうちやくを持っているか、由紀知っている？」

「理由？ 理由なんかないよ。ただ、部員を思うがままにいたぶりたいだけじゃないの？」

「由紀ってば……これだから。由紀は、無防備すぎるんだよ。手押し車しているとき、いつもどこ見ているのよ」

「どこって……。大体、床に落ちている人の汗を避けるために下か……斜め……前？」

「あはは！ 斜め前って……。あのね、あいつ、他のやる気のない練習メニューの時は、一人で壁打ちしているし、隙すきがあれば私達を狙ってボール当ててくるでしょ。最低よね。ま。それはおいておいて……。なぜか手押し車の時は、パイプ椅子に座って視線を動かさない。一定の高さを保たもつたまま、ただじーっと耐えている」

陽子は右手の人差し指をまっすぐテーブルと水平に伸ばし、その指先をじーっと見つめた。が、

ふと氷がかなり溶けたことに気づき、その手をカップへと移動させた。

「なんで!？」

由紀はテーブルに伸ばしていた両手をあごに当て、身を乗り出して聞いた。ストローが口から落ちて、カップへとおさまった。ボリオについては興味がなかったが、なんだかそそられる内容だ。

陽子の含みのある話し方が、余計に気になってしまう。

「一番胸が見える高さだからだよ」

「……は？ ……胸？」

「あの高さの位置が一番、体育館を這はうように進む女の胸が見えるんだよ。気づかなかった？」

由紀は絶句した。そして、目の前でこうだと言わんばかりに制服のシャツの胸元をパタパタと広げる陽子に目を奪われた。考えてみれば確かにそうだ。手押し車の、身体が下向きで宙に浮いた姿勢だと、体操服の丸く縁取られたところが大きく開き、胸元が見えてしまう。

「あいつ!! もう信じられない!! 最初から信じてないけど、二度と会いたくない!」

由紀は、そう叫ぶと、残ったカップの中身を狂ったようにグルグルとストローでかき混ぜた。黄色い汁が、テーブルのあちこちに飛び散る。陽子が見ると、由紀の真つ白な夏服のシャツの胸元にも点々と黄色いものが付着うわさしていたが、敢あえてそれを指摘する勇氣はなかった。

「まあ、あくまで噂うわさだし、確かな情報じゃないけどね。でも、今度由紀も見えてごらんよ。鳥肌たつから」

陽子は投げやりに言う、まだ水の残る液体全てを勢いよく飲み干し、次の瞬間には両手で頭を抱えテーブルに突っ伏した。うめき声をあげながら、足をジタバタと動かしている。由紀が何度注意しても、陽子はかき氷の食べ方を変えることはない。飲み込んだあとに襲う頭痛が気持ち良いらしい。共感できず眺めているうちに、今では違和感さえなくなった。かき氷を食べ終え、店長に売れ残りのパンを幾つかもらうと、二人は店を出た。

「あ、今日あたしこっちだから。ここでバイバイだあ」

普段はもつと先まで一緒に帰るのだが、今日由紀は、祖父の店へと行く約束をしているのだ。

「あ、そっか。夏休みの宿題？ いいなあ、頭のいいおじいちゃんがいて。試験の前と夏休みの度に、答えを教えてもらっているんだもん」

「そんなこと言ったって、昔教師だけあってかなり怖いんだよ。それを、こっちは低姿勢でお願いして教えてもらっているんだから、あたしも苦労しているんだって」

少しづつ陽子から離れるように後ろ歩きをしながら、由紀は困ったように肩をすくめた。

「おじいちゃんが嫌なら、宿題も裕太君と仲良く済ましちゃえばいいじゃない。優しく丁寧に教えてくれるよ。きつとね」

「ダメだめ！ 裕太はあたしより馬鹿だもん。あたしが、参考書や問題集を調べて回ることになつて、反対に面倒くさくなっちゃうよ」

二人はそこで大声で笑うと、頭の上で大きく手を振りあつて別れた。かき氷で冷えた身体も、風ひとつない田舎道を数十メートルも歩けばすぐに火照つてしまう。祖父の家は、高風中央高校から由紀の自宅とは反対方向へ徒歩十五分ほど歩いた場所にある。徒歩だと、自宅へ帰るより近いので、週末は祖父の家へ泊まることも時々あった。しかし、距離だけの問題ではなく、由紀にとってそこが魅力的なもので溢れている場所だというのが最大の理由でもあるのだ。由紀の祖父は、小さなアンティークショップを経営している。といっても、決してオシャレな可愛い雰囲気（ふんいき）の店内ではなく、蛇や蜘蛛（くも）の巣窟（そうくつ）のような自動ドアもない店だ。それでもこの店は、マニアの間で名前が通っているようで、地方からもそれなりの人数の客が訪れているから不思議だった。

店の裏には家が併設（ひいせつ）されている。祖母は十年近く前にすでに他界しているので、祖父はそこですつと一人暮らしである。店に訪れる客が多いせいか、何度由紀の両親が同居を勧めても「寂しくない」の一点張りで店と家を離れようとはしないのだ。

「おじいちゃん！ 遅くなつてごめんねえ！ いるう!？」

入口となる両扉の右側を横にスライドさせると、ガタガタと軋（きし）んでそれは開いた。

店の中へ入ると、微かに蚊取り線香の匂が残っている。足をさらに踏み入れると、客を知らせるメロディである「大きなのっぽの古時計」の冒頭だけが流れた。それでも、祖父が家から出てくる様子はない。由紀が子供の頃から、いつ来てもこの店は変わらない。多少、太陽の光が入りにくくて暗いのが難点だが、それが余計にこの店の異様な妖艶（まじか）さを増長させているのだ。壁にはいくつ

もの棚が置かれ、商品がきれいに陳列されている。大きな物は壺や掛け軸、小さな物は腕時計やボールペンまで扱っているのである。勿論、ひとつひとつの扉には鍵が取り付けられ、厳重に管理されているのだが……。他にも、祖父はお客には見せない品物を持っている。それは、たいてい店の一番奥に置かれた、小さな腰丈ほどの棚に入っている。外見は、どこの家庭にでもある靴箱のようだ。まさか、その中に品物があるとは思えないほど、それはみすばらしい入れ物だ。由紀は、祖父が絶対に売りたくない物をここへ入れておくことを知っていた。なぜなら幼少時代、祖父は由紀だけに滅多に見られない数々の品を見せてくれた。それは、不思議な形のものが多かったのだ、由紀の記憶には残りやすかった。ちよつとだけ触らしてくれたあと、由紀を店からさりげなく追い出すと、祖父は一人でこっそりとそこに品物をしまうのだ。由紀は、そんな祖父の姿を隠れて何度も見ていた。しかし、成長するにつれて祖父はその小さな棚の中身を見せたがらなくなり、由紀も尋ねることとはなかった。なんとなく、聞いてはいけない気がしたのだ。そんなことを思い出しながら、ぐりと店の商品を見渡し、家へと繋がる廊下へ上がろうとした時だ。その靴箱のような小さな棚の引き出しから、緑色の布がはみ出しているのが目に入った。近付いてよく見ると、それは唐草模様の描かれた風呂敷のようだ。由紀が最後にそこを開けたのがいつだか定かではないが、確かにそんなものはしまっていないはずだ。不審に思い、その布に手を伸ばそうとした時だった。

「お、やつと来たか。裕太が待っているぞ。早く上げれ」

祖父の声が背後から鋭く聞こえてきた。悪いことをしていたわけではないのに、肩がびくつと跳

ね上がる。そして祖父の聞き逃せない言葉に振り返ると、顔をしかめて言った。

「裕太が!? なんて?」

しかし、祖父は彼女を見てはいなかった。まるで汚物を見るかのような目で、はみ出した布を睨んでいるのだ。そして、由紀が店を何をしていたのかを探るように覗き込んでくる。由紀の頭の中は、なぜ裕太がいるのかでいっぱいだ。祖父に文句を付けるように唇を尖らせる。

「ほらほら。だから早く上がらないさ」

祖父は、問いかけに答えることなく言った。店専用に使っているサンダルを履くと、由紀をそこから追い出すかのように背中を押す。店というより、その棚から遠ざけようとしているかにも見える。そんな祖父に違和感を覚えたが、由紀は背中を押されるまま靴を投げるようにして脱ぎ散らかし廊下へ上がると、一目散に居間を目指して走った。

「ゆうたあああ!」

由紀は、居間に来ると目をつり上げて鞆を放り出し、湯気の上がるお茶を飲みながらテレビを見ている裕太に、滑り込みタックルをかました。

「あっちいっ!」

由紀の行動を読んだのか、湯飲みをすぐにテーブルに置いた裕太だが、勢い余ってお茶が手にかかったようだ。だが、タックルされたこと自体については何も言わない。むしろ、何が面白いのか、声を上げて笑っている。しかし、すぐに追いかけてきた祖父が、由紀の頭を風が起るほどの強さ

で思い切り叩いた。

「馬鹿か!! 女の子が何している! パンツが見えているじゃないか!」

由紀は笑っている裕太を軽く睨みながら離れると、新しいお茶を入れている祖父に向かって右手を挙げて言った。祖父は元教師。今日は宿題をしに来た。ここはまさに学校だ。発言するには挙手が必要なのだ。そして、すぐに訴える。

「だって……。だって、おじいちゃん! あたしが、今日宿題教えてもらうって言ったのに……。なんで!? なんで裕太もいるの!!」

「一人も二人も変わらんだろう」

由紀の我が儘には祖父も慣れっこだ。溢れそうなほどのお茶を湯飲みに注ぐと、由紀の前に置いた。

「じいちゃん優しいよなあ! 俺の家にさっき電話くれたんだよ!」

「ずるい! ずるいずるい!! あたしのおじいちゃんなんだからね!」

「由紀……。それじゃあ、今日はお前が帰るんだ」

祖父は由紀の方を見て、一瞬の笑みを見せることもなく言った。

「裕太はわしが招待した。お客様だ。さあ、やるぞ。まずは国語か?」

「由紀、早くノート出せよ。ほら。国語持ってきているんだろう?」

裕太は祖父とは対照的に笑顔で言ったが、由紀はべーっと舌を出してそっぽを向いた。

いつも裕太はこうして何をしても許してくれるが、祖父に叱られてまでここに居ることは癪だ。

まるで慰められ、子供扱いされているような気分だ。

「いいもオンド! せいぜい馬鹿が教われればいいでしょ! あたしは一人でできるもん!」

啖呵をきって放り出した鞆を掴むと、全速力でまた店へと戻る。ピカピカに掃除された廊下は、靴下で滑って転びそうになってしまう。店まで来ると、廊下の一番端に座り込み、耳を澄ました。すると、聞こえてきたのは、何事もなかったように二人が宿題を解いている声だった。二人が追いかけてもこないことに、余計に悔しくなってしまう。由紀は、自分が我が儘なのはわかっていた。祖父を独り占めしたい独占欲と、裕太に甘えたい不明な感情が心の真ん中で喧嘩するのだ。最後はこうして拗ねて逃げ、一人仲間はずれの気分浸って後悔する。しばらく、二人が様子を見に来てくれることを待って見たが、予想どおりどちらも来てくれない。無性に虚しくなると由紀は小さくため息を吐くと、ぶるぶるでもらったカレーパンを鞆から出し、それをかじった。先程出てくれたお茶を飲みたくなるが我慢だ。脱ぎ散らかした靴を、足を伸ばして拾い集める。靴を履くと、店との境である廊下に腰かけ両足をブラブラさせた。店の商品のあちこちに目をやる。そして立ち上がり、パンを食べながら店の中を一周すると、先週末であつた気味の悪い紅い壺が消えていることに気づいた。客が買ったのだろうが、由紀は売れたことに少しだけ安心した。それは経営においての問題ではない。気味が悪かったのだ。祖父はその壺がどれだけ値打ちのある物か、由紀に話してくれたことがあつた。大昔の有名な陶芸家が自分の余命を知り、せめて死ぬ前に自分の分身ともなりうる何かを残したくて、毎日手首を数ミリずつ切りながら流れ出る血液で塗った壺だった

そうだ。どのような処方おこなを行つたのか、壺は色が剥はがれることなく、ずっときれいな鮮血の紅を保っていた。それを聞いただけで触さわりたくなくなった。ここには似たような由縁の物が多々あるのだ。壺があつた場所には、今は仏像らしきものがある。白目をむいていて死んでいるような顔だし、右腕は折れてしまつてない。こんなものに、何の価値があるのだろう。

ただ、異質なもののばかりではない。ほんの少しだけ、まともな物もある。そのひとつが、レトロな化粧台であり、由紀のお気に入りだ。この店では特に人気がないようで、一番奥に追いやられていたが由紀は密かに売れないように願っている。おそらく心配ないだろう。ここでは異質なもののほどよく売れるのだ。あつという間にパンを食べきると、いつものように三面鏡の前の椅子に座り、走つて乱れた髪型を整えた。全く気づかなかつたが、肩ほどの栗毛は真後ろに癖くせがついている。それを撫なでつけていると、鏡越しにレジ脇の小さな棚が目に入った。先程まで飛び出していた布の切れ端が消えている。由紀は、祖父が気づいて、しまったのだらうと思つた。しかし、それならば由紀に気づかれないように短時間で隠したようではないか。祖父は、なぜそんなに急いだのだ。何を隠そうとしたのだらうか。由紀の好奇心がくすぐられる。一人ニヤツと笑みを漏らすと、さつきまで頭の半分以上を占めていた宿題という問題も、二人が追いかけてこない虚しさも、煙のように消えていった。どうせ裕太は、由紀が何も言わずとも、教えてもらった宿題の答えを見せてくれるはずだ。結局はまた甘えることになるが、それは自分の特権であり安心感を与えてくれる要素でもあつた。それならば、この時間を無駄にするのは勿体ない。由紀は祖父が隠した物の正体を見たくて

堪たらなくなつてしまつた。

居間の方へ耳をそばだてるが、誰の足音も聞こえない。由紀は椅子から立ち上がり忍び足で棚に近づくと、小さな秘密の引き出しを軽い力で引いてみた。

……ガチャツ……

やはり鍵が閉められている。こうなると、諦あきらめるどころかますます探求心が増してしまふ。逸はなる気持ちを抑える。もはや誰も追いかけてこなかつたことが幸運だつたと思えてきた。もう我慢できない。たとえ商品を見て怒られたとしても、このまま帰ることで気になつて寝られない夜を過ごすよりマシだ。決心が固まりさえすれば、あとは行動を起こすのみ。開かない引き出しにチツと舌打ちをして、祖父が鍵束を隠している大きな壺に手を入れた。由紀の腰丈ほどである壺は、何に守られることもなく置いてある。一見、品物かと間違えそうだが、普段から雨傘が何本も突っ込んであるので、誰も目をくれない。由紀は、先程布に気づいて店から追い出そうとした祖父の顔を思い出し、小さく笑つた。自分は何もお見通しなのだ、という気持ちを込めて。

……よしっ！

傘の柄をかき分けて壺の底を探ると、指先に、冷たい金属の感触が伝わる。鍵束は以前と変わることなく置いてあつた。祖父は、由紀が鍵束の場所を知っているとは思っていないのだろう。見たいものがあれば、由紀は小鳥のようにピーチクパーチクと拝おがみ倒したし、品物が紛失したことは一度もなかった。祖父は由紀を甘く見ていたが、由紀は祖父が思うほど子供ではなかった。店の秘密

はかなり握^{にぎ}っているといつても過言ではない。祖父の目の届かないところで、ずっと一人で店を家探^{さが}していたのだ。祖父は全てを見せてくれるとは限らない。そんな時、昔から由紀はこうしていたのだ。たとえ面白い商品^{おもしろ}が何も出てこなくても、それは違う世界に飛び込んだ物語の主人公にでもなったような気分が味わえる魅力的な冒険だったのだ。

もし……、もしも祖父が、鍵^{かぎ}の在^{あり}処^かを一定期間で移動させていれば、これから三人を巻き込む不幸は起こることはなかったのだが、そんなことを彼らは知るよしもなかった……

鍵^{かぎ}を掴^{つか}んだ由紀は、極度に震える心臓を抑えて、再度居間からの足音を確認する。鍵束は十個の形の違う鍵が輪に繋がれているのだが、長年の一人で行った試行錯誤の結果、由紀はすべてがどこに当たるのかを完全に把握していた。今欲しているのは金色で、まさに物語に出てきそうな細い棒状のものだ。先端にふたつだけ横に向かつて突起物がついている。由紀は、手に取ったそれをまじまじと見つめると、棚の前にしゃがみ鍵穴へ差し込んだ。その鍵は常に磨かれているように光沢を放っており、見るだけで興奮の度合いが増していく。そのまま九十度右に回すと、期待どおりの音が聞こえた。

カチッ……

開いた!!

感動して声を上げかけ、慌てて両手で口を塞^{ふさ}ぐ。そこで初めて、自分が息を止めていたことに気

づき、由紀はゆっくりと息を吐き出した。喉^{のど}はカラカラだし、心臓は今や勝手にどこかへ走り出しそうなほど速く打っている。緊張しすぎたのだ。しかし、これこそが由紀の楽しみのひとつになっているのかもしれない。昔から、こうして隠れてひとつひとつ鍵を開けて探検することに、多大な時間を要してきた。新たな発見を求めてワクワクできる。これが最高に堪^たまない。

息が落ち着くと、鍵束を今ではどの店でも使っていないような旧式のレジの上に置いた。

棚の引き出しは全部で三つある。鍵穴はひとつ。しかも一番下の引き出しにだけ鍵が付いているというのも不思議だ。普通ならば一番上ではないだろうか。鍵のついていない一番上には常に筆記用具や計算機、二番目には些細な文具の換え置きくらいしか入っていない。このふたつは店の中で唯一鍵のない場所でもあるのだ。そして、大体祖父の秘密の商品は三番目にある。

念のため一番上の引き出しを開けてみる。すると、いつもと中身が違う。首を傾^{かじ}げ、真ん中の引き出しを開けてみる。そこも同じだ。以前はいつぱい物が詰まっていたそが、両方とも何も入っていないのだ。どこかに移してしまったのか……。なぜだろう。捨てるつもりなのか。祖父の行動と連動して、ますます不審感が湧く。あの布は、何だったのだろうか。半ば諦^{あきら}めかけて意中の引き出しを開けた瞬間、ゴトツという鈍い音が聞こえ、黒い物体が倒れたのが見えた。光が入るように身体をよけながら覗^{のぞ}き込むと、そこにあったのは以前にも見たことがある物のようなのだ。だが、それは随分前のような気がする。記憶の端っこに追いやられていたけれど、確かにそうだ。それは祖母がまだ生きていた頃に見たものだ。なぜ、それがこんな引き出しの中に隠されているのだろう。

光に当たって姿を現したそれは、現在ではあまり見かけなくなった形の古いカメラだった。太いレンズが獲物を求めるように突出している。そのカメラには、先程の唐草模様（たかくさようよう）の布が無造作にかけられているが、保護されているというにはほど遠い。由紀は、時間が止まったように数秒カメラを見つめた。吸い込まれるように両手が伸びる。布で包むようにしてカメラを取り出す。真つ黒なそれは、顔が半分隠れてしまうほどの大きさだ。妙に黒光りしている姿は堂々としていて美しい。ほっと息を吐いて秘密を暴いた満足感に浸り、引き出しに戻そうとした由紀の耳に、居間から裕太の笑い声が聞こえた。裕太は、このカメラを見てどんな反応をするだろうか。彼が、一時期カメラに夢中になったことがあるのを、由紀は思い出した。その頃の二人はまだ中学生で、裕太は面倒くさがる由紀を自転車（じてんしゃ）の後ろに乗せては色んなところに連れて行って写真を撮った。ふたつ隣の市まで出かけ夜中まで帰らず、両親から大目玉を食らったこともある。由紀は、嫌々な素振りを見せてはいたが、あの時の裕太が嫌いではなかった。カメラのファインダーを覗く裕太は、キラキラして眩しかったのだから。そんな裕太だ、これを見れば喜ぶに決まっている。その顔を想像して楽しくなってきた由紀は、少しだけカメラを拝借することにした。すぐに返せば、きっと大丈夫だと自分に言い聞かせて。

祖父がどの品物に対しても手袋を嵌めて触るのを思い出し、鞆を引き寄せてタオルを取り出した。せめて布だけでも引き出しに戻そうと思ったのだ。部活で由紀の汗を大量に染み込んでいるだろうそのタオルに少なからず抵抗はあったが、手袋がない今は構ってられない。

カメラをタオルで慎重に包み、棚の上に置く。布は、無駄な努力かもしれないがカメラを包んでいるように見えるようにできるだけふくらと形を作った。引き出しに戻す時、それはすぐに変形したが、見なかったことにする。急いで鍵を閉めると、気が緩んだのか思わず鍵束を元の壺に投げ入れてしまった。鍵束はガシャツと傘とぶつかる音を立ててから、底に落ちたようだ。

想像以上にそれは大きな音で、由紀は心臓が跳ね上がった。

おじいちゃんが来るかもしれない！

由紀は、カメラを無我夢中で学生鞆の中へ突っ込んだ。すでにアンティーク物だとは忘れたかのような乱暴な動作で、傷のひとつふたつは避けられなかったであろう。由紀が何事もなかったかのように鞆を持ち、店内を歩き回っていると、祖父がタイミンク良く様子を見に来た。音を聞きつけたのかは定かではないが、とりあえず見つかってはいいまい。祖父は一瞬棚に目を走らせたが、由紀が棚から離れたところにいたのと、祖父の足下にパンくずが散らばっていることが安心要素になったようだ。由紀を見ると、すぐに言った。

「なんだ由紀。まだいたのか。店なんてウロウロしていても面白くないだろう。それならおいで。おやつを出したぞ。裕太はもう食べているから、お前も分けてもらいなさい」

由紀は、鞆の中で眠るカメラを思うと罪悪感が湧いたが、〃分けてもらいなさい〃という言葉尻に引つかり曖昧に頷くと、居間へ逆戻りした。

また店から追い出された気がしなくてもないが……。居間に来ると、すでに山盛りのお煎餅（せんべい）が器

に入っていて、裕太がお茶を片手にボリボリかじっている。

「裕太、ジジくさい。バリバリ食べて……」

今度は鞆をそつと床に置き、由紀は裕太の隣に胡坐をかいた。由紀の鞆の置き方に違和感を覚えたのか、裕太は、快調に動かしていた口を止めてジツと由紀を見ている。

「こらっ！ なんちゅう座り方しているんだ！ 女の子だろう！ またパンツが見えている!! いい加減にせんか!!」

トイレに入った音が聞こえたと思ったが、祖父はもう居間にやってきた。彼の行動はそこらへんの若者よりも数段早い。居間の脇に重ねてある座布団を一枚取ると、かなりの力強さで投げつけた。由紀は、重心を右に傾けそれを避けると、ごまのつたお煎餅に手を伸ばした。祖父に、当てるつもりなどないことは承知している。

「だってえ。どうせここには裕太しかいないもオン。平気平気」

裕太と同じようにバリバリ食しながら答えると、祖父はそんな孫娘に呆れ、座布団を自分で拾いに行った。

「じいちゃん、いいんだよ。こいつ俺の部屋来ても常にジャージだもん。胡座なんてマシだよ。制服でいるだけ見られたもんだって」

祖父は、それでも何か言いたげに口を開いたが、その時客を知らせるあのメロディが居間まで響いた。祖父は怒りを抑え込むように仲良く煎餅をかじる二人を一瞥すると、さっさと廊下を歩いて

いつてしまった。由紀はごま煎餅を食べ終え、ざらめに手を伸ばした。裕太が床に置かれたままの由紀の鞆をチラチラと見ているのが視界に入る。

「なあによ。人の物ジロジロ見ないでよオ」

さらにもう一方の手で掴んだ海苔付きお煎餅をかじりながら由紀が言うのと、鞆と由紀を交互に見ながら裕太が答えた。

「お前さ……。その鞆、何が入っているの？」

いかにもお見通しだといわんばかりの目つきが、また憎たらしい。素直に、カメラが入っていると言うのは勿体ないではないか。

「何だつていいじゃん。関係ないでしょ。それに入っているのなんてタオルと体操服だけだし」
突き放した返答をすると、裕太は何かを確信したように余計しつこくなった。

「やっぱり！ なあ何？ 面白い!? 俺が見たことない物!？」

何がやっぱりだ、と心の中で突っ込むも目が泳いでしまう。

裕太とは小さい頃から祖父の店で一緒に遊んでおり、商品を見ては彼が興奮する姿を目にしている。あの不気味な紅い壺にさえ、由紀が嫌がるのを横目に裕太は興味津々だったのだ。カメラなどと言えば、尚更騒ぎ始めるに決まっている。

「何？ 何もないうって。くっさあいタオル。……嗅ぐ？」

由紀のあまりにも可愛げない答えに、一瞬呆れた顔をした裕太も、負けじと反撃を開始した。ま

るで、ふたつの穴から蒸気のような鼻息が飛び出しているのが見えるほどだ。

「いや、嘘だね。だって、居間に来ると思い切り鞆を放り投げる由紀が、あんな風に優しく置くんだけ!? わかるよ。でも、由紀が中身を教えないならいいよ。俺も教えない」

裕太は、この短い間に祖父に教えてもらい少しは終了したであろう、宿題のノートを鞆にしまっ
てしまうポーズを作った。祖父は、裕太に教えたから聞けと言うだろう。今、絶対に失ってはいけ
ないアイテムだ。こうなれば、敗北宣言をするしかない。

「……わかった。わかりました!」

由紀は頭の中で算段を終えると、裕太の手を掴み、鞆に入りかけているノートを優しく取った。

「言うから! はじめから言うつもりだったし。でもね、ここだとおじいちゃんもいるし、やばい
から後でもいいかな?」

由紀は店の方を顎で示し、眉間に皺を寄せた。

「よし! じゃあ俺達は帰るか。他の教科は、また聞きに来ればいいじゃん。お客さん、いつ帰る
かわからないしさ」

と言うより早く、裕太は全てを鞆にバサバサと押し込んだ。こういうところは、裕太は単純で強
引だ。しかし、視線を由紀の鞆から決して離すことがないのを見て、由紀はばれてしまったことを
後悔し始めた。きつと、裕太はしつこくまとわりついてくるはずだ。二人は荷物をまとめると、靴
を置いている店へと向かった。すると、ちょうど祖父が釣り仲間の村山さんを連れて、居間へ来る

のとすれ違った。お客ではなかったらしい。

「お、なんだ帰るのか、すまん」

祖父は口ではそう言ったものの、二人を帰らせるつもりだったようだ。村山さんにもらっただろ
う酒瓶を、嬉しそうに抱えている。これから夜まで魚の話ばかりするのだろう。

「また来るね。村山のおじいちゃん、こんにちは」

「じいちゃん、さんきゅ。また答え教えてなあ」

祖父に引き止められなかったことは都合がいい。二人は駆け足で店の外まで一気に出た。

「はあ……。あの調子じゃ、ばれてないなあ! 危ない危ない。鍵の場所をあたしが知っているつ
てわかったら、もう柵の中を自由に見られなくなっちゃうもんね」

裕太が自転車の鍵をはずしている間、由紀はソワソワと店を窺って言った。裕太は彼女の鞆に何
が入っているかものすごく知りたくなかったが、とにかくどこかへ連れていくべきだと思い、素早く
サドルに跨り由紀を呼んだ。

由紀を後部座席に乗せて自宅へ行こうとしたが、家族に見つかっても面倒くさい。そこで、家か
ら五分の場所にある象の公園に向かった。象の公園は正式名称ではないのだが、象の鼻の滑り台が
シンボルなので、それが愛称となっている。

「着いたぞ」

ゆつくりとブレーキをかけて、裕太は公園の入口に自転車を停めた。あまり広くはないこの公園

は、夕飯前のこの時間子供達が占領していて、今はベンチがひとつだけしか空いていない。とりあ

えず二人で並んで座ると、由紀は大きく深呼吸した。由紀から見れば、あれはただのカメラでしかなかった。しかし、あれほどまでに祖父が嚴重に管理することから、何か秘密があるのしか思えない。なにせ、柵の中にある他の物を全部どこかに移してまで、これを隠しているのだ。これが毒を持った汚染物であるかのような扱いだ。それをどう裕太に伝えるか、どうやって焦らすかを由紀は楽しみたかった。

「あのね、秘密の柵で見つけたの」

何から話せばいいのかわからず、とりあえず由紀は言った。

「秘密の柵？ 俺、由紀ほどあの店に詳しくないし、どれだかわかんないけど。何を？」

「これ……」

由紀は、鞆の中から、微かに臭うタオルに包まれた物体を取り出した。

「うえっ!!」

自分のタオルの臭さに反吐をく真似をしながら、急いでカメラだけを取り、タオルは鞆へ戻した。そして、念のためカメラに鼻を近づけて臭わないのを確認すると、裕太の膝の上にそっと置いた。

「うっわ!! すごい古そう!」

裕太の顔が、一瞬で輝きを放った。顔をしわくちやにして笑いながら由紀を見て、興奮したように手をおろおると動かしている。由紀が見たかったのは、この笑顔だった。もちろん、想像どおり。

とはいっても、やはり嬉しい。盗ってきた甲斐はあったと言える。裕太も、由紀同様手袋など持っ

ているはずもない。自分の両手をしばらく見つめると、少しでも汚れがつかないようにと服の裾でゴシゴシ拭いた。由紀も自分のタオルをもう一度出す気にはなれなかったので、それを黙って見ていた。そして手を拭いたあと、裕太はためらうことなく両手でカメラを掴んだ。

「どのくらい昔のなんだ？」

「わかんない」

「わかんないって……。これ、どこにあったんだよ？ わからないで持ってきたわけ？」

裕太は、突出したレンズをいじりながらファインダーを覗き込み、由紀に聞いた。

真っ黒なそれは、裕太の顔も半分近くが隠れるほどに大きい。構える姿だけを見れば、カメラマンに見えなくもない。つまり、さまになっている。公園には、今いくつもの被写体があるのだから、撮影の環境には最適だ。

「お店のレジの脇にね、小さい柵があるのわかる？ あそこは、おじいちゃんが大切にしている物しかしまわないのよ。で、傘立てになっている壺はわかるでしょ？ あの中に隠してある鍵で開けたら……これがあった。何だかわかんないけど、裕太の……」

喜ぶ顔が見たかった、とは言えない。

「馬鹿が見たがるかと思ってね」

慌てて付け足すが、裕太はさして気にしていないようである。カメラをいじりながら由紀に言った。

「カメラだけ？ 他は？ 説明書とか、これで撮って現像した写真とかさ」

「なあーんも。でも、あたしこれ覚えてるわ。ずっと昔……見たことがあるの」

「……じゃあ、売らないで取ってあったってことか？ じいちゃんがただのカメラをなんでそんな大切にしているんだろう。古いからかな？ おかしくないか？」

「でしょ？ 何にでもまずは商品が傷つかないようにするのに、これは変な布一枚で無造作に投げ込んであったようだったし……。とりあえず、ネットでカメラの種類を確かめてみようかと思っているの。……裕太が、ね？」

「ま、いいけど。でもめっちゃかつけえー!! もしかわかったら、俺にもちゃんと貸してくれよ」
裕太は言いながら、カメラを離さずにいじり回した。もうすでに、由紀と同じく指紋や傷などどこ吹く風だ。いくつか付いている丸いボタンのような突起物や、レンズの周りに書いてある数字の用途は不明だが、旧式のカメラでも部品の位置にさほど変化はないようだ。それに一番肝心なのは、シャッターのみだ。裕太は、三つ並んだ内の一番右にあるそれらしき突起物を軽く人差し指で押してみた。

すると、今まで静かだったカメラが、息を吹き返すように唸ったのだ。独特の機械音が鳴り、五秒ほど経ったあと静かになった。フラッシュの光は出なかったが、それでも裕太の心臓は写真が撮れたかもしれない喜びで舞い上がった。

「えっ!? 今の音聞いた？ 中で鳴ったんだよな？ 今、撮れたと思う!? 由紀見ていた!? これさ、一眼レフカメラってやつだろう？ 俺さ、昔ちよつとだけカメラ撮っただろ？ お前覚えている？」

裕太はこんなに簡単に動くとは思わなかったようで、さらに興奮してレンズを見つめながら言った。その声の大きさに、近くで遊んでいる子供達が数人振り返った。由紀も、裕太に言われるまでもなく当時のことを考えたのだ。そのことが少しだけ嬉しかったのに、気持ちとは裏腹につい冷たくしてしまう。

「裕太の場合はカメラっていつでもデジタルカメラでしょ。それも親のだし。撮るっていつでも空とか猫だったしい」

由紀は答えながら、レンズの向けられた先を見た。

そこには今の時代も、小さな子供達が遊ぶ、当たり前前の光景がある。由紀は、ここで裕太と遊んでいた昔を思い出し、ふと胸が締め付けられた……

「じゃあ、まずはネットだー!」

由紀は思い出を振り切るようにベンチからすくと立ち上がり、制服のスカートについた砂を手で払った。裕太はまだカメラを眺めながらも、由紀に促されるようにして自宅へと帰ることにした。由紀の真似をして、裕太も自分の練習着でカメラを包むと鞆へ突っ込んだ。公園を出る二人に目を向ける者はなく、ただ自転車だけが二人を待っていた。一旦自宅に戻ると、由紀はまず台所へ行き冷凍庫にあるアイスバーを二本鷺掴みにした。そして、階段を駆け上がって自室へと入る。

一方裕太は、同じく家に入るとすぐにリビングを覗いた。ガラス戸の向こう側には、今日も父親が一人ソファに寝転がりテレビを見ている。起きたのは何時なのか、未だにパジャマを着ていることが、彼を幻滅させる。見なかったふりをして、足音を忍ばせ階段を中程まで上がった時、突如、後頭部を殴られたような衝撃につんのめった。左手で階段に手をつき身体を支え、もう一方で痛む後頭部を確認するように撫でながら、後ろを振り返った。裕太が振り返ると同時に、ビールの缶が一段一段、ごろんごろんと音をたてて転がり落ちていくのが見えた。それはすでに蓋が開けられており、残っている液体が階段を汚していく。痛みで多少視界がぼやけたが、階下を見下ろすと、パジャマ姿の父親が裕太を睨み上げていた。

「お前は挨拶もできないのか。誰のおかげで学校に行けていると思っている」

父親は精一杯の怒りの言葉を吐き連ねたようだが、その声は聞き取るのがやっとの小さなものだった。

「ただいま……」

その真似をしたように裕太もボソボソと返すと、父親は息子を睨み舌打ちしながら、それでも大人しくリビングへ引き返していった。

裕太の父親があんな風になったのは、一年前の事故が原因だった。去年の夏頃まで、父親は一流企業の化学工場で働いていた。すでに管理職まで上り詰めており、現場を日に何回も見回りしなければならぬ業務があった。工場内を歩いて回るのはいい気分転換でもあり、コミュニケーション

上でも大切だと、父親は裕太に話したことがあった。しかし不幸にも、その見回りで事故は起きたのだ……

新人の作業員が工場の敷地内をよそ見して歩いていたため、脇からトレーラーが出てきたことに気づかなかった。通りがかった裕太の父親は、自らがそこに飛び込んで新人を助けたが、自分はトレーラーに巻き込まれ右足が不自由になってしまったのだ。三ヶ月ほど入院し復職する予定だったが、会社からもらったものは思わぬ解雇宣告だった。不当だと訴えたにもかかわらず、身体の不自由には逆らえずに微々たる退職金をつかまされてそのまま追い出されてしまった。裕太の姉はすでに成人し会社勤めをしており、それなりの収入はあった。そして母親もパートに出ている。二人の収入と、父の退職金を合わせれば、当面の生活費に困ることはなかった。しかし、父親の傷ついた心と家庭の重い雰囲気は、一年経った今も変えることができない。

一年前の事件は、近所でも一時話題になったほどだった。

父親の見舞いにも様々な人が来てくれて、本人も明るく、ヒーロー気取りだった。しかし解雇された直後からは、いくら家族が声をかけても家を出ることがなくなり、人が変わったように怒りを周りにぶつけ、酒をあびるように飲んだ。

裕太は、この状態が続くのが嫌で、大学は地元を離れたいと思う気持ちがあった。だが一方では、由紀と離れたくないという思いもあり人知れず悩む日々を送っているのだ。

由紀の家族も、最初はなんだかんだと目に付く気遣いをしてくれたのだが、事情を知ると、ある

時から触れなくなった。それは幼なじみである由紀も同様で、裕太に何も言うことはない。たとえ二階の裕太の部屋と一緒にいる時、階下から父親の怒鳴り声が聞こえてきようとも、彼女は触れないでいてくれるのだ。裕太の身体に不自然な痣を見つけたときもあつたが、由紀は一瞬驚いて目を見開いたものの、何も聞いてはこなかった。裕太には、それがとてもありがたく居心地がよいと思えたし、進学という些細な理由で彼女との場所を失うのは何よりも無意味なことと思えた。

裕太は、後頭部をさすりながらため息を吐くと、鞆を取って再び階段を上り自分の部屋に入った。由紀は、すでに窓からやってきている。今し方の一件も聞こえたかもしれない。しかし、やはり物音については何も聞いてこなかった。

由紀がいつもやるように鞆を放り投げると、裕太はふと思った。もうひとつ由紀が聞いてこないことについてだ。由紀は気づいているのだろうか。彼は、由紀がいつでもこうして自由に入れるように部屋の窓の鍵を開けたままにしているということに……

「おそおい。裕太は、やっぱりボールが足下にないとどのろまだ。……はい」

由紀は持参した宿題のノートを開きながら、アイスを手渡した。残念なことに、それは暑さに負け、袋の中でほぼ液体になりつつあった。

「さんきゅう。ちょうど腹が減っていたんだよ。……でも、お前がくれる物は、いつでも溶けているな」

先日チョコを思い出しながら袋を開け、とりあえず口の中に液体になったものを流し込む。

「部屋に来るのが遅い。それと、字が汚い」

普段見せない必死な表情で、由紀は裕太の鞆の中から宿題のノートを出して睨んでいる。

文句ばかりだが、今日は由紀がジャージに着替えてこなかったことで大目に見るとして、とりあえず裕太はパソコンの電源を入れた。立ち上げの音楽と同時に、画面が明るくなっていく。

「おい、由紀。パソコン開いたぞ。調べるんだろう？ こっち来いよ」

六畳ほどの部屋だが、パソコンのある机と由紀が座っているベッドは部屋の両端だ。

「写しちゃうから、裕太先に調べといてよ。さつき公園でも言ったでしょ。調べるのは……？」

「俺ね。はいはい、しょうがねえな」

裕太は、自分の鞆に入れたカメラを取り出すと、パソコンの脇に置いた。部屋に入ってくる西日が、ちょうどカメラのレンズに反射する。部屋がオレンジ色に染まっていくこんな時、なぜか裕太はドキドキするのだ。急にこの部屋に由紀と二人でいることを意識してしまう。

「どうやって調べるかな……」

そんな邪念を振り切るように、裕太はカメラに目を向けた。実物は目の前にあるが、これほど古いものは製造をしている会社のホームページにも載っていないだろう。もう販売はしているはずがないし、大量生産されたとも限らない。

「カメラ？ “アンティーク” とかの言葉で検索かけてみれば？」

ノートを眺める由紀に横から言われ気づいた。

「そっか。そうだよな！ 検索検索！」

「裕太はバカ」

すぐにその二語で検索をかけると、ヒットしたスレッドが現れた。ただしそれだけのワードだと、ゆうに数千を超える。裕太はそれに、“写真”を加え、再度出たスレッドを上からひとつずつチェックした。しかしどれを見ても、なかなか実物と同じ物は発見できない。大体一九六〇年代あたりまでのものがアンティーク扱いされていることくらいしかわからなかった。一番似ていると感じた写真も、手元の一眼レフカメラと並べてみると形がもつと丸みを帯びている気がした。一時間ほど画面と格闘するも、めばしい物は見つけれない。目が疲れてシヨボシヨボし始めた頃、由紀はやつと宿題を写し終えた。しかし、裕太の想像どおりパソコンを見ることがなく、“また来る”とだけ言い残して、窓を乗り越えて自室へと帰っていった。一人残された裕太は、あてもない検索を諦めると、ついさっきまで由紀が転がっていたベッドに身を伏せた。身体をよじって、枕を抱く。慣れない作業に肩が凝り、いつの間にか眠りに落ちてしまった。

3 恐怖

由紀が裕太の部屋に戻ってきたのは、夕飯と風呂を終えた十時を少し回った頃だったであろうか。まさか今日中にまた来るとは思っていなかった裕太は驚いたが、少し睡眠を取ったあとに部屋で黙々と検索を続けた結果、いくつかのそれらしきものを発見していたことに内心ホッとした。

「お邪魔しますウ。はい！」

由紀は部屋の窓から乗り込んできると同時に、何かまた小袋をひとつ投げてきた。裕太が自分の股に投げられたそれに目をやると、また半分溶けた餡玉^{あんたま}だったがありがたく食べることにする。もはや、突っ込む気分にもなれない。すでにジャージに着替えていた由紀が、床ではなくベッドに転がったのを見る限り、検索に協力する姿勢は窺^{うかが}えない。由紀は腹這^{はらば}いになり、両手で頬杖をつきながらジッとパソコンに向かう裕太を見つめた。パソコンに夢中になりながらも由紀の視線に気づいた裕太は、夕方の変な気分が再燃し、余計に意識してしまい視線を画面からはずせなかった。

「ねえ」

「……」

カタカタカタカタ、キーボードを打つ音が部屋に響く。

「ゆうちゃん」

由紀は、呼びかけても見向きもされないことで、最初こそ足をジタバタと動かして駄々をこねてみせたが、結局仰向けに体勢を変えると寝始めた。部活で疲れた身体に、布団は天国のようだ。

ギシッ……

眠りかけていた由紀が、ふと気配を感じて目を開くと、真上に裕太の真剣な顔がある。それは三十センチの物差しが一本も収まらないほどの近い距離で、まつげの数まで数えられそうだ。突然すぎて声も出せず、一切の身動きをしない由紀に、裕太は勢いで跨ったものの、次にどうすればいいのか迷っていた。足と足が触れ合う感触が、リアルに伝わってくる。

「なあんだ。起きたのかよ。つまんねえなあ」

あたかも意地悪をするつもりだったという様子を装い、無理矢理冗談でかわすと、裕太はベッドから下りた。一瞬の沈黙が怖かった。由紀は、嫌がる素振りも見せなかったが、決して受け入れてくれるような愛情表現もしなかった。冗談以外、どう返せというのだ。

「ほら。いくつか当たってそうなのメモしておいたから。由紀も確認してみてくれない？」

「メモかよ」

由紀も何事もなかったかのように、そっけなく答える。

「しょうがねえだろう、俺の部屋に印刷機ないんだから。とりあえずこっち来いよ」

こんな時間にベッドに二人でいると、余計な妄想に取り憑かれてしまうため、裕太は机に由紀を呼んだ。寝ている由紀を見て大人しくしてられるほど、裕太はもう子供ではない。最近、ここにいると由紀に触れたくなる回数が増えた。触れようと思えば、それは可能だ。抱きしめたとしても、間に割り込んでくる奴もない。この部屋には二人しかないのだ。何でもできる。だからこそ、不安だった。幼なじみの関係から一歩踏み出す勇氣は、まだない。しかし、その一歩を急かすように、この部屋は準備が万端に整っているのだ。

由紀がヨチヨチ歩きの手で机まで来ると、裕太は何枚かのメモのうち、一番有力情報であろう二枚を見せ、説明を始めた。

「とりあえず、最初カメラは一八八〇年くらいに、イギリスやアメリカで作られ始めたらしいんだ。意外にも日本が一番じゃないんだ。当時は二眼つまりレンズがふたつあって、次に一眼という今の形になったらしい」

「へえ……。って、ふたつも眼があつてどうすんのよ」

「まあ聞けつて。とにかく今あるこれは、一眼のカメラだ。だからその一眼の中で、どれに一番近いかを確かめた。ヒットしたスレッドにもなかなかなくて、ひとつひとつの企業まで確かめたんだからな。わかるか？ この苦勞が。調べてみれば由紀にもわかるけど、膨大だぞ？ 世の中に数百というカメラが生まれているんだからな。どうだ？」

「わあ。ゆうちゃんすごいい……」

とは言葉だけで、由紀の棒読みな言い方に全く感情はこもっていなかった。感謝の言葉など所詮^{しよせん}期待していなかったので、裕太は続ける。

「それで、最初は数が多いから日本の企業だけ見ていたんだけど、どんどん外へ目を向けた。まあ海外が主流だったから仕方ない」

「馬鹿な裕ちゃんか？」

「そこで！ 海外の企業を探して探して探した結果、これを見つけた！」

「シカトかい……」

「由紀！ 聞けって！ これを見ろよ！ この写真と、このカメラは同じだろう!？」

裕太は一人でどんどん興奮して、パソコン画面にある写真と脇に置いてある黒いカメラを何度も見比べている。

「どれ」

由紀も机の上に顔を出すと、言われたとおりにふたつを眺めた。同じ色で同じ形。レンズの位置から丸みをおびたラインまでそっくりだ。

「……そうかも。よくできましたあ！」

由紀は二カッと歯を見せて笑うと、裕太の短髪でチクチクする頭を撫^なで回した。

「それじゃあ、次だね。相当古いみたいだし。使えるのかな？ お店にしまっただけあるくらいだから、使えないと意味はないだろうし……」

「そうだなあ。さっき、俺が公園でシャッター押した時に音が出ていたし、多分撮れると思うよ。ちゃんと構えて撮ったわけではないけど、何か写っているかもな」

「ということは、フィルムが入っているのかな？」

「当然だろ。ほら。おそらくフィルムはこの中だ」

裕太がカメラの裏側を見せると、小さな蓋^{ふた}が付いている。確かにこれは古そうだが、どこをどう見てもそんなに価値のあるものとは思えなかった。

「使い方も調べてはいるんだけど、なにせ専門用語が多くてな……。昔はフィルムひとつだって大発明だったんだぞ。いいか？ 一九三四年にエキザクタっていう種類のカメラで初めて使えたらしい。フォーナノルプロンシャッターを装備して一二七のフィルムを使用できたんだ！ それはロールフィルムで……。つまり店でも見かけるやつだろうな。それまではな、カメラのフィルムも色々あったんだ。撮ったら一枚一枚交換するシートフィルムとか、一定角度回転して次のコマを出す円板状のディスクフィルムとか。それにな……」

裕太は調べたあげたカメラ知識を、メモを見ないようにしながら読み上げたが、由紀はほとんど聞いてない。じつとカメラを見つめたまま、眠そうな声で言った。

「なんでもいいけどオ。とりあえずこのカメラは、そのエキザクタ以降に作られた、フィルムの使用できる、この写真のやつなのね？」

ルフィルムが主流に製造されるようになったらしいけど、問題はまだあったんだ」

「問題……？ なあに？」

由紀の視線が、パソコンから再び裕太に移る。

「おおまかに言うとか、撮影する時に物がブラックアウトしたり、反対に絞りこむとファインダーが暗くなったりするらしいんだ」

「ブラックアウトってなに？」

「……」

「やっぱり馬鹿だあ。もういいや」

「……とりあえず、このカメラは完全版ではないが、アンティーク物としてはヤバイな。マニア達の間では、かなりの希少価値らしいぞ」

「あつそ。じゃあお店に戻しておかなくちゃ」

「骨董市に出品するとかのやり方次第では、高くても百万以上で売れるぞ」

「えっ……!? 百万!? 本当に!? どうしよう裕太!! 売る!? 売れるかな!?」

ずっと無気力に聞いていた様子の由紀が、いきなり両目を輝かせた。女は時として金なり。裕太にはそんな言葉が頭を過ぎったが、変な考えを起こされる前に、書いたメモを机の中にしまった。毎月のお小遣いの値上げ交渉にも失敗している高校生なのだから、百万と言われれば売りたいくなる気持ちもわかったが、裕太にはそんな考えは毛頭なかった。

「アホ。じいちゃんに殺されるぞ」

そう言うとか、まだ目を輝かせている由紀をよそに、裕太はパソコンの画面を切り変えてサッカーのゲームを始めることにした。ぶうつと頬を膨らませた由紀は、さっきは撫でた裕太の髪の毛を今度は思い切り引っ張った。「いてっ!!」と裕太が叫んだが、彼女はそんなことは気にしない。

「それじゃあ、このカメラ持っていくよ! ありがとね!」

由紀は、カメラを慎重に扱うことは半日で諦めたようで、素手でレンズの丸い部分を驚掴みすると窓を乗り越えるために、ベッドの上で足をあげた。

「あ! 由紀!! ……あの子、俺さ、頑張ったよな?」

ゲームの画面を見ながら裕太が言うと、由紀がクルッと振り向いた。近づいてくる姿が視界に入るが、裕太は知らんぷりを決め込んだ。今の言い方では、まるで褒めてもらいたいがために調べたみたいに聞こえるではないか。なんて恥ずかしいことを言ったんだ、と裕太が後悔していると不意に真横に由紀の気配を感じた。一瞬だった。由紀は腰をかがめると、裕太の左頬にキスをしたのだ。

裕太が驚いて左を見ると、由紀が真横数センチの距離にいた。今度は、三十センチ物差しどころではない。十二センチの物差しも入らないほど近い。裕太は、パソコンのマウスを放り投げけるように置き、由紀に向き合った。心臓がどくんと波打つ。見つめ合うというのがこんなに緊張するのは知らなかった。いつも見ている顔同士が、意味を持って近くにある。それだけで、自分の中の欲望が首をもたげるのを裕太は感じた。ありったけの抑制を自分にかけて、ぎこちないが優しさを込

め、裕太は自分から由紀の唇にキスをした。それは恐る恐るという感じで、くつついたのかわからないうちに離れてしまった。

「じゃ」

何の余韻に浸ることもなく、由紀はおもむろにしつかりと立つと、目を合わせることもなく今度こそ窓を乗り越えていつてしまった。反対に、裕太は一寸の身動きもできなかった。

ゲームからは、裕太の負けを告げる試合終了のホイッスルが鳴っていたが画面を見る気にもならない。

「由紀と……キス」

唇の線の人差し指でなぞる。

「キス……した……」

頭の中でもう一度リップレイをかける。ジワジワと現実感が溢れだし、裕太は机の下に転がっているサッカーボールを思い切り右足で蹴った。ボールが机に当たり、勢いよく跳ね返ってきたのをまた壁に投げる。

「うっしやああああ！」

両手を突き上げ、一人喜びの声をあげた。誰にこの気持ちをわかつてもらえるだろう。いつも側にいる。それなのに、一度も触れたことがなかった部分に、やっと辿り着けたのだ。

裕太は転がったボールを手で取り、思い切り抱きしめると、もう一度それを由紀だと思って唇を

近づけた。

しかし、次の瞬間には現実が戻ってきた。

一階で何かが割れる音と両親の怒鳴り合い、そして、姉が二人を宥める声が聞こえたのだ。裕太は、ついさつきまで高ぶっていた気持ちが一気に醒め、泣きたい気持ちになりながらパソコンを消してベッドに潜ると、頭まで布団をかぶった。ベッドの中には耳栓がふたつあり、それを手で探って見つけると両耳にしっかりとめめる。たとえこの行動が弱くても情けなくても、裕太はこれがないと眠れなかった。姉も母親も、そんな裕太を助けに呼ぶことはないのだ。その夜も、裕太は耳栓のおかげで異空間にいるような眠りの中、静かに過ぎていった。

翌日、裕太が目を覚ますとちょうど朝の八時だった。耳栓をはずし、耳を澄まして様子を窺うが、家の中で物音はしないようだ。部活の練習は九時からなので、もう少し布団でゆっくりできると思いながら由紀の部屋を見ると、カーテンが閉まっている。

由紀のことだから、昨夜の出来事など何も感じていないのだろうと思ったが、どんな顔をするべきかとはばらく考え、結局その時の自分に委ねるという結論に達した。

「うう……」

あの幸せな出来事を思い出すと、どうにも痛く自分の下半身を必死で抑えつけ布団から勢いよく飛び出すと、壁にかけてある制服に腕を通した。着替え終わり一階に下りると、リビングに入る。

そこで父親と鉢合わせることを恐れたが、逃げ腰でいるのも癪だ。昨日、挨拶をしないで殴られたことも納得はいかない。しかし、本当は裕太達家族はわかってるのだ。父親は、働けない自分を家族が少しでも邪魔物扱いすることが怖いのだ。怖いからこそ、強くあろうとしている。だから、些細な挨拶さえ無視されることを、異常なまでに怒るのだ。わかっているが、近付きたくない。だが予想に反して、ドアを開けると父親の姿はなかった。ホッとして食卓に行き、置いてあったパンを掴んで口に入れ牛乳で流し込むと、鞆を掴んで逃げるように家を出た。

「おオ！ ラッキー！ 乗せてえ」

何という偶然か、由紀も裕太と同じタイミングで家を出てきたらしい。

「由紀！ 朝ご飯くらい食べなさい！ これから運動するんですよ！」

まだ開いている玄関の隙間から、由紀の母親が叫んでいるのが聞こえる。

「それと、早くおじいちゃんに返すのよ!!」

裕太は驚いて、自転車の後ろに乗り込んだ由紀の顔を振り返った。

彼女はペロリと舌を出すと、

「ばれちまった」

とだけ言った。裕太はため息をひとつ吐くと、ペダルを漕ぐ足に力を入れる。あんなことをしてしまった以上、今は由紀の母親と顔を合わせづらい上に、部活に遅れそうだ。とりあえずは学校へ行かないと始まらない。由紀が鞆を間に置くことで、裕太は二人の間にまだ距離を感じながらも、

自転車は軽快に走っていく。朝だというのにすでに蒸し暑い。さつき着たばかりのシャツの背中がジワツと汗で濡れる。

「どうするんだよ!!」

学校へ向かう大通りで、車の騒音や風を切る音に負けないよう、裕太は後部の由紀に半ば叫ぶように聞いた。

「大丈夫だよオ！ お母さんはきつと言いつけないし、もう返したって言えばあ！ もう少しだけあのカメラ見ていたいでしょオ！」

朝だというのに、由紀もよく通る声で叫び返した。そういえば、由紀は朝が得意なのだ。高校に入ってから出発の二時間前に起きて、テレビを見ながらゆっくりすると言っていた。それなのに、たまに朝ご飯を抜くことから、理解できない。直前まで布団で寝ていた方が得ではないか。

「俺、怒られたくないからなあ！ どこに隠したんだ!？」

「弱虫裕太!! いいもオん！ 部屋に隠したからねえ!!」

二人で叫び合いながら会話をしていると、その声を遮るようにどこからか救急車が近づいてくる音が聞こえる。裕太は規則的なサイレン音に耳を集中させ、どの方向からやってくるのかも知れぬ救急車を目を探しながら、学校へ続く裏道に入ろうと右に曲がった。

キキキイツ!!

その途端急ブレーキがかかり、後部でのんびりしていた由紀は前に座る裕太に両手でしがみつ

顔を彼の背中に押し付けてしまった。

「ちよつとっ！ ゆ……う……っ！」

由紀が裕太の背中からヒョイと顔を出して前を見ると、すごい人だからである。救急車の音もさらに近付き、大通りから裕太達の後を追うように入ってきた。いつもなら目的地に近づくときサイレンを消すが、それも忘れていたようだ。

「どいてください！ 救急隊です！ 担架が通ります！」

青い服を着た男性の二人組が、担架を持って人混みをかき分けた。由紀達が、呆然として少し離れた後方で見守っていると、人混みの中心に横たわる二人の子供らしき足が見えた。その足を見た途端、由紀は咄嗟に裕太の背中に顔をうずめ、無意識に身体を震わせた。裕太は、多少事故に興味をそそられたが、後ろで震える由紀に気づくと自転車を反対方向に向けて、何も言わずに走り出した。多少遠回りになるが、もしも残酷な光景なら見せないほうがいいと思ったのだ。側には停車中の車がある。それが轢いたのだろうことは、後輪に血がついていることから明らかだった。先程裕太が見た子供達の足は変な方向へ曲がっていた。由紀には、それさえも見せたくないが、この様子では見てしまったのかもしれない。いつもは触るうとしなくせに、シャツではなく裕太の腰に腕を回している。あまりにも力が入っているので、肉を抓られていたようで痛かったが、裕太はペダルを回転させることだけを考えた。少し離れたところまで来ると、自転車を止めた。珍しく泣きそうな顔をしている由紀をなんとか宥め、帰ることを勧めるが首を縦には振ってくれない。仕

方なく、裕太は学校へと自転車を飛ばした。そして、サッカー部員がウォーミングアップを行う前を素通りし、バレー部が集まる体育館へ突っ走ったのだ。

体育館の前では、すでにジャージに着替えた陽子が、キョロキョロと校門の方を眺めていた。

「あ！ 由紀！」

自転車が見えると駆け寄ってきたが、由紀の様子がおかしいことには気づいていない。

「早く早く！ ポリオはまだ来ていないけど、練習始まっているよ！ 心配したんだから！ 携帯は繋がらないし！ あ、裕太君ありがとね！」

自転車を止めると、裕太は自分の肩にかけていた由紀の鞆を陽子に渡しながら言った。

「待っていてくれたなんて悪いな、陽子ちゃん。練習は大丈夫なの？」

「ううん、いいの。まだランニングくらいだし。それにこの子、最近ポリオに目を付けられているから、私がちゃんと見張っていないと！」

「目……？ なんて？」

「あ、ごめん。余計なこと言ったかな。この間由紀が倒れた時にね、ポリオが身体触ってニヤニヤしていたんだよね……」

「なあっ！ ……んだよそれ！ おい!! 本当なのかよ。由紀!!」

裕太が、自転車からノロノロと降りた由紀の両肩を掴むと、由紀は力なく笑った。

「大丈夫だつて……お父ちゃん」

冗談で返すと、倒れそうな足取りで体育館の中へ一人で歩いていってしまう。

「おいっ!! 由紀!!」

言われてみれば、裕太にも心当たりはあった。由紀が倒れたあの日、帰りがけに校門で見た最初の顔は、熱中症で倒れたわりには真っ青でおかしかった。由紀は、理由をはぐらかして言わなかったじゃないか。

……くそオ!!

裕太が、憎しみを込めて一点を睨^{にら}んでいると、陽子が袖を引っ張った。

「裕太君、なんかあの子の様子変じゃない?」

「ああ……。そうだった」

裕太は、先程鉢合わせした事故の状況を伝えた。連れてきたものの無理をさせないでほしいことや、帰りに迎えるから待たせておくことなど、念を押して頼んだ。これでは由紀の言ったとおり、本当にお父ちゃんじゃないか、と思いつながら。

「そっか。わかった、まかせて。私がちゃんと見ているから。裕太君も急がないと、部活に遅れちゃうよ」

腕時計を見ると、すでに二十分も開始時刻を過ぎてしまっている。

「やっべえ! じゃあまたあとで!」

裕太は適当に自転車を止めると、後ろを振り返ることなく校庭へと走った。

それを確認してから、陽子が由紀の鞆を持って体育館へ入ろうとすると、脇からマネージャーのあつこが麦茶の入ったポットを手に現れた。

「聞いちゃったあ聞いちゃった」

「あつこ……。聞いたって何を?」

「ねえ、陽子。あの二人って付き合っているの?」

「知らないって。気になるなら本人に確認して。悪いけどそういう恋愛ネタは苦手なの」

行く道に立ち足はだかるあつこを避けようとするが、彼女は道を譲らない。

「いいじゃん! 興味あるんだもん! 私だって部活の友達でしょ? 教えてよオ」

「いや、友達だけど……。幼なじみでしょ、あの二人」

「ええー。それだけであんなに心配する!? 絶対に付き合っているよ、あの二人。私、由紀が倒れた日に送るって言ったの断られたんだよ? 実際は、裕太君が送っていったってタクが言っていたんだよ!」

タクとは、この夏サッカー部の部長に任命されたばかりの裕太の親友だ。噂では、あつこに何度も告白したが、玉碎しているようだ。それでも諦めずに追いかけているため、今では「あつこの腰巾着」と陰で呼ばれている。

「まあ家が近いんだから、偶然会えば普通でしょ。由紀はそう言っていたよ」

「いや、付き合っているとは思えないって！」

「付き合っていたならそれはそれじゃん。あっこには別に関係ないでしょ。……って。あ！……もしかして！」

二人は見つめ合った。ムキになっていたあっこは、少しだけ気まずそうに笑うと、体育館に吸い込まれるように消えていった。

あのあっこがね……

由紀には言わないほうがいいかな。

陽子は次々に来る新しい問題にため息を吐き、メニューに置いていかれないよう急いで体育館へと入った。走って体育館の中にある部室まで行くと、由紀は陽子が鞆を持ってきてくれるのを中で静かに座って待っていた。『静かに』というより、『何もできずに』の方が正しいかもしれない。

陽子は、そんな状態の由紀にやはり帰ることを勧めたが返事はなく、仕方がないのでジャージに着替えさせてあげると、一言ありがとうという呟き（つぶや）が聞こえた。まるで子供だ。

「由紀。シヨックだろうけど、しっかりするんだよ！ そんな調子で部活に出ても、ボール君に殴（なぐ）られちゃうからね!?」

「……うん」

「裕太君が帰り迎えにきてくれるって言っていたから、それまで頑張ろう？ ね？」

「……うん」

それ以上の返事は期待できなさそうな由紀に、陽子は聞いてみたくなった。恋愛ネタが苦手だなんて、でまかせだ。

「それで？ 由紀と裕太君は付き合っているの？」

「……うん」

「えっ!? 本当に!? 由紀!! いつからっ!?」

思わぬ答えに興奮して、由紀の肩をぐらぐら揺らした。

「えっ？ 何？」

由紀は、今初めて陽子の言葉が耳に入ったように、焦点を定めて言った。

陽子のがつくりと肩を落とし、尋問（あきろ）を諦めて部室から連れ出すと、あたかも始めからいたかのようには部員達の中に紛れた。由紀を睨（にら）む一人の視線を確かに見たが、大して影響はないと踏んだ。付き合っているといまいと、それは本人達の問題だ。少なくとも自分には関係ないと、陽子は心に言い聞かせた。

そのあとも暑さの中、過酷（かこく）な練習はいつもどおり行われたが、ボリオは数時間経っても体育館には現れなかった。スパイク、サーブ、筋トレ、その他様々なメニューをこなした最後の練習試合を始めたときに、やっとボリオはやってきた。特に部員に声をかけることもなく、ただパイプ椅子に座りじっと練習風景を見てはブツブツ独り言を言っているようだ。どことなく機嫌の悪さを醸（かも）し出していたために、誰も近づくことはない。そして予定どおり、練習は終了の時刻を迎えた。

部活中、由紀はミスが多く声も全く出なかったが、陽子が気を回して何人かに今朝の出来事を話してくれていたもので、注意されることもなかった。由紀の元気がないのは明らかで、終了するとすぐに、陽子是由紀を着替えさせて、サッカー部の練習場まで連れていった。

裕太を見つけて、お互いがまるで保護者のように挨拶をかわすと、由紀の引き渡しは終わった。そして陽子は、由紀の頭を撫でると言った。

「じゃあ、由紀。また明日ね」

「うん。ばいばい……」

手を引かれて裕太の自転車に乗ると、由紀は鞆を裕太との間に挟むことなく背中にしがみつき、そして顔を埋めた。由紀は、もう誰に見られてもどうでもよかった。今は背筋を張ってしっかり座っていられるほど、身体に力が入らないのだ。

「由紀……。おい」

裕太は突然の出来事に、緊張のあまり足が震えてペダルを踏み出せない。背中に心臓が動いてしまったようだ。由紀が顔を押しつけた部分だけ、火傷でもしたように熱くて痛い。

「汗くさい……」

しかし、裕太は由紀のその一言で震えが止まり、次には笑ってしまった。緊張しているのは、自分だけらしい。

「臭いで死ぬなよオ！」

その言葉をきっかけに、急発進した自転車は自宅までまっしぐらだ。今朝の事故現場を意図的に避けることで距離は増し、さらに部活で疲れた足に二人分の体重は負担も大きかった。毎度こうするわけにいかないが、裕太は、せめて今日だけでも後ろで顔を埋めている由紀に辛い思いをさせたくはなかった。

飛ばしたおかげであつという間に自宅へ着くと、裕太はとりあえずまだ自転車に跨ったままの由紀を置いて、彼女の家のチャイムを押した。

ピンポン……

チャイムと同時に由紀と間違えそうなくらい似た声の中から聞こえ、すぐにドアが開いた。

「あつ！ 裕太君、こんにちは。由紀……は？」

裕太の後方から、生気のない顔で歩いてくる由紀を見て、母親は驚いて駆け寄った。

「ちよつと由紀！ どうしたの!? 真っ青じゃない！」

「あの……おばさん。実は朝、国道入ったところの事故と鉢合わせしちゃって」

「あ……、やつぱり会っちゃったのね」

裕太と母親が話しているても、由紀は無言で家の中へ歩いていく。

「おおい！ 由紀！ ……おばさん、由紀すごいショック受けたみたいで。学校に行くって言ったら連れていったんですけど、ずっとあの調子で……。すいませんでした」

「いえ、今日はありがとうね。鞆まで持たせちゃって。もううわ」

立ち読みサンプル
はここまで

そう言うのと、裕太の手から由紀の鞄を取り、母親は心配そうな顔で家の中を見た。

「でも嫌ね。今朝の事故、あれから大変だったみたいよ。三軒隣の双子ちゃん、山口さんとこの。あのお嬢ちゃん達だったみたいよ。可哀相に……、二人で公園に行くって出ていったんだって。象の公園に行けばあんな事故に遭わなかったのね。ほら、向こうの大きな公園へ行こうとしたらしいの。運転手の居眠りが原因で、病院で亡くなっちゃったって。私も、さっきお隣さんに聞いたんだけどね」

「ああ！ そういえば二人が同じ靴履いていたかもなあ。足だけしか見えなくて……。俺達を通ったときに救急車が来たんですけど。そうですか」

「本当は救急車を呼ぶまでもなかったみたいなの。手足は折れて、顔も結構ひどくぶつかられたみたいで……。由紀が見てなくてまだよかったわ」

「足だけでも……かなりトラウマっすね……」

裕太は、言いながらすぐに脳裏に浮かんだ、捻れた足の映像を振り払った。

「そうよね……。それとすぐ急だけど今日お通夜やるらしいから、私も行こうと準備しているの」

「あ、そうなんですか。おじさんは？」

「相変わらず仕事ばかりで。ほとんど単身赴任のようなものよ。今日は朝から名古屋へ泊まりで出張なの」

「じゃあ由紀は……？」

「そうね、確かにあの様子だと心配だわ。でもおじいちゃんにもお店があるから頼めないし。お通夜にも連れていけないし。山口さんは泣き叫んで大変らしいのよ。そりゃ一気に二人とも亡くなったらおかしくなるわよね……。ああこういう時に兄弟がいたらって思うわ」

由紀の母親は話しながら、意味ありげに裕太を見た。顔が、そして目がすでに頼んでいる。

「あの……、よかったら俺が見ていましょうか？」

裕太はその答えが期待されていることを承知で言った。由紀が心配なのはもちろんだが、少しでも側にいることを許されたようで嬉しいのだ。由紀の家で、自由に動ける。元氣のない由紀を励ます役に、母親が任命してくれたのだ。信じてもらえているのだ。裕太が、心の中でガッツポーズをしていると、母親は昨夜の由紀と同じように目を輝かせた。

「本当!? よかったわあ、裕太君がいれば安心！ おばさん遅くなるだろうから、冷蔵庫を勝手に開けて食べていいからね」

母親はいそいそと下駄箱から履いていく靴を探しながら言った。

「わかりました。じゃあ鞄を置いたらすぐに来ます」

言葉どおり、裕太は自宅玄関を開けると、身体を少しも入れることなく鞄とボールを投げた。そして、一目散に由紀の家へと戻る。スピードを上げすぎて、垣根に突っ込みそうになりながら、今度はチャイムを押すことなくドアを開けた。

「お邪魔しまあ……す」